

69 最後の高等学校（その二）

水川¹⁾ 秀海・鳴村²⁾ 昭辰

報告者は戦後の医学・歯科医学教育改革に関心を持っていた。非公開の教育刷新委員会会議速記録が公開され平成七年より岩波書店を通じて出版が開始された。不明であった教育刷新委員会での医学・歯科医学教育関連の討議の詳細と全貌が明らかになった。これを機に水川は平成九年より日本歯科医史学会総会や月例会で戦後歯科医学教育の歩みを報告してきた。平成十一年の総会では「最後の高等学校」と題して戦後の医学・歯科医学教育の改革により廃校を余儀なくされた医専と歯科医専の学生救済を目的とし、これ等学校の校舎・設備を利用して特設された理科のみの旧制高校について開校に至る経過を中心に報告した。戦後の医学・歯科医学教育改革に関する資料は少ないが特に特設高校の資料は少なくその発掘が重要であることも強調した。昭和二十二年特設され

た旧制高校は官立二校（長崎医大付属医専・徳島医専が前身の長崎高校と徳島高校）公立三校（山梨県立医専・福岡県立医学歯学専門学校医学科・秋田県立女子医専が前身の山梨県立高校・福岡県立高校・秋田県立高校）私立二校（東洋女子歯科医専・日本女子歯科医専が全身の東洋高校・日本高校）の七校である。

福岡県立高等学校同窓会は卒業五十周年記念誌の発行を目的として編集委員を中心に資料収集が進められた。県立でありながら県に全く資料がなく困難を極めたが平成十二年に「(旧制)福岡県立高等学校卒業五十周年記念会誌」は発刊された。今回これを機に福岡県立高等学校について報告する。

福岡県立医学歯学専門学校医学科は戦後の医学教育改革で昭和二十二年二月廃科が決定し在校生は存続が決定した他の学校に転校することになったが転校を希望しない学生のために特設高校を設置することにした。同年三月福岡県立医学歯学専門学校医学科善後措置（特設高校費）十五萬三千七十二円が計上され高等学校開設準備室が発足した。五月文部省に学校設立を申請し五月三十一

日付で認可された。六月校長事務取扱に中尾莊兵衛(福岡県民政部長)が就任して同時に後藤源太郎(生物学)安河内隆(人文学)を教授に補する文部教官辞令が出ている。七月医学科からの転入生の他に新一年生の生徒募集と試験を行い八月に入学式を挙行した。教授二名、助教授講師各一名、非常勤講師五名、生徒八十三名の開学であった(廃校までの四年間の延教員数は教授三名、助教授又は講師六名、非常勤講師九名)。二十三年四月二期生九十八名が入学、卒業式は一期生が二十五年三月二十五日で五十七名の卒業、二期生は二十六年三月四日で八十八名の卒業であった(卒業生百四十五名の進路は医科大二十三名、歯科大八十四名、他大学三十八名)。昭和二十六年三月三十一日廃校となり校舎及敷地は県立九州歯科大学の管理下におかれたが一部は県立北九州盲学校に委譲された。

特設高校の多くは二期生を入学させながら卒業にいたらず二期生まで卒業したのは県立福岡高校だけのようである。多くの教育関係資料で旧制高校の終焉は昭和二十五年とされているが県立福岡高校は二期生を卒業させた

ことによりその終焉は昭和二十六年となった。特設高校は旧制度の「高等学校令」によつて設立されているが「高等学校規定にかゝわらず云々」という文部大臣の定めによつて校舎設備・教育数などの基準のハードルは下げられていた。しかしカリキュラムは法令の基準通りであった。県立福岡高校の卒業生から寄せられた時間割表からもそれは推測できる。県立福岡高校は従来の高校同様制帽に白線二条を付け、寮歌を作り歌い、最後のインターハイにも参加して青春を謳歌すると共に勉学に打ち込み、卒業生は医師・歯科医師或は技術者として各界で活躍している。

(1) 浜松市、(2) 九州歯科大学